



Title	Pigmented basal cell epithelioma I. Statistical study II. Histological study
Author(s)	三木, 吉治
Citation	大阪大学, 1963, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28604
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 4 】

氏名・(本籍)	三木吉治
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 450 号
学位授与の日付	昭和 38 年 9 月 30 日
学位授与の要件	医学研究科内科系 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	Pigmented basal cell epithelioma I. Statistical study II. Histological study (主査) (副査) 教授 藤浪 得二 教授 宮地 徹 教授 吉田 常雄
論文審査委員	

論文内容の要旨

〔目的〕

基底細胞癌のうち、色素沈着を伴うものは白人種の間では比較的稀なものとされ、色素性母斑、老人性疣贅、更には悪性黒色腫との鑑別が屢々問題とされている。

我が国においては、色素沈着を伴う症例が比較的多い事にヒントを得て、日本人における本症の頻度を調べ、更に、本症の色素沈着が如何なる因子の影響をうけているか、また、組織学的には如何なる質的、量的特徴を示すものであるかについて研究した。

〔方法並びに成績〕

全国46大学附属病院の41を訪れ調査した。1956～1960の5年間に皮膚科外来を訪れた新患851,685例のうち、200例が基底細胞癌であった。このうち、88例は明らかな色素沈着を伴い、男性106例中の57例、即ち約半数、女性96中の31例、即ち、 $\frac{1}{3}$ が本症に属する。年令分布では、男性例でやや若年令層に本症が多い。腫瘍発生部位を露出部、非露出部に分けて、性別、色素沈着の有無別に比較すると、それらの間に有意義な差がない。発症より初診迄の期間では、男性例で10年以上を経たものに本症が多く、女性例で3年以内のものには少ない。また、初診時の腫瘍最大径に関しては、一般に男性例は女性例よりも、又、色素沈着を伴うものは伴わないものよりも、最大径の小さいものが多い傾向が見られた。

阪大皮膚科で1956～1962年に見られた41例の基底細胞癌について調べると、26例は色素沈着が著しく、これは前述の全国例のそれに相当する。更に、10例は著明ではないにしても色素沈着は認められ、臨床的に全く色素沈着の認められないものは5例に過ぎなかった。色素沈着の程度と腫瘍の他の型像との間には有意義な相互関係は認められず、即ち、色素沈着の程度に拘わらず潰瘍型、次いで結節型が多くみられた。色素沈着は黄褐色～黒色で、点状～び慢性であるが、主として潰瘍縁に沿って存在し、潰瘍底に見られる事は少ない。

組織学的検査は阪大症例41例について、連続切片をヘマトキシリソ・エオジン（41例）、鈴木氏鍍銀法（8例）、ドーパ（5例）、チロシン（4例）によって観察した。2例を除くすべての症例において、程度の差こそあれ、メラニン色素の増加が認められ、その分布は①腫瘍周辺の表皮基底細胞、または、メラノサイト、②腫瘍実質中のメラノサイト、及び、③色素沈着を来たした表皮直下、及び、腫瘍実質周辺の間質にあった。このうち、②は腫瘍胞巣の位置、及び同一胞巣内でもその部位によって異なるが、一般に、表皮と接する腫瘍胞巣部に最も密に分布し胞巣の周辺部から中心部へ移るにつれて、次の様な種々の段階的变化が区別された。即ち、周辺部のメラノサイトは肥大性で、メラニン色素で充満しているか、ドーパ陽性、チロシン陰性を示す樹枝状細胞で、2本の長い主突起と多数の副突起をもつが、胞巣中心部に向うにつれて見出されるものの順を追って述べると、先ず、副突起が消失、ついで、主突起も短縮し、細胞質内メラニン顆粒は粗大となり、ドーパ陽性を失う。遂にはメラニン顆粒の充満した円形の非樹枝状細胞となり、そのうち、あるものは明らかに自潰して多数の粗大メラニン顆粒を放出し、他は相互に、更に、放出されたメラニン顆粒と融合して、胞巣中心部に巨大な色素塊を形成する。この色素塊は、胞巣の潰瘍化、及び、胞巣と接する表皮の落屑過程によって外界へ排出される。猶、腫瘍細胞自体にはメラニンは認められなかった。

〔総括〕

日本人の基底細胞癌の40%以上は明らかな色素沈着を伴う。この頻度は精査すれば更に高率となる可能性があり、従って、色素沈着は日本人の基底細胞癌の重要な徴候の一と看做し得よう。本症は男性例において特に高率で、やや若年令層に多いが、日光による影響は受けていないと考えられる。また、男性例では発症してから長期間を経たものに色素沈着を伴うものが多いにも拘わらず、女性例に比べて初診時の最大径が小さい事を考え合わせると、男性では色素沈着を来たす様になって初めて受診するものが多いとも考えられ、また、これらの症例では成長の遅い、即ち、より良性のものが多い事を暗示している。

組織学的には、殆どの症例でメラニン色素の増加が認められ、腫瘍実質中に、本症に特異的とさえ考えられる多数のメラノサイトの種々相が観察された。このメラノサイトは腫瘍胞巣中でも表皮と接する部分に存在する事から、腫瘍が増殖して表皮に達する時、表皮中から腫瘍中に二次的に侵入したものと想像され、増殖してメラニンを生産するが完全な色素伝達ブロックの為にメラニンを腫瘍細胞に与える事なく、そのまま種々の変性過程を経て遂に外界へ放出されるものであろう。表皮中のメラニン増加は皮膚の炎症時にも屢々見られ、腫瘍に対する生体組織の反応と見てよく、また、間質中のメラニンは表皮及び腫瘍から間質に流下したものが組織球に喰食されたものと考えられる。

論文の審査結果の要旨

本論文は色素性基底細胞癌について、その頻度と色素沈着の程度、他の臨床型との関係及び悪性度を統計学的に調査し、更に組織学的にメラニン色素の分布を研究したものである。元来、本邦では基底細胞癌の発生頻度が欧米のそれに比較して低く、従って、臨床像に関しては未知の点が少なくない。著者は全国46大学附属病院のうち、41カ所を直接訪れ、1956～1960年の5年間に基底細胞癌と診断されたもの200例の資料を得て検討した結果、色素沈着が日本人の基底細胞癌の重要な臨床徴候の一つである事を発見した。

色素沈着は男性例の約半数に、女性例の約1/3に認められ、発生部位を露出部と非露出部とに分けて比較すると、その間に有意義な差はなく、従って、日光による影響は除外出来ると考えられた。年令分布、発症から初診迄の期間、及び、初診時の最大径を見ると、色素沈着を伴う症例は伴わない症例に比べて、やや若い年令層に多く、而も発症から初診迄の期間の長いもの、且つ、最大径の小さいものに多い傾向が見られた。これらの事から著者は、成長の遅い、即ち、臨床的により良性のものに色素沈着を伴う症例の多い事を指摘した。

また、阪大病院皮膚科を訪れた当該疾患者について更に詳しく調べると色素沈着の頻度は尚高率であった。

組織学的には、殆どの症例でメラニン色素の増加が見られ、既述の統計上のデータを裏付けると共に、腫瘍実質中に多数のメラノサイトを見出し、これが本腫瘍の色素沈着に特異的な役割を果していると考えた。著者は、これらのメラノサイトは表皮中から二次的に腫瘍中に侵入、増殖したものであるとし、それがメラニン色素で満たされている事と、腫瘍実質細胞内にはメラニン色素が存在しない事を確かめ、正常表皮層では生理的に行なわれているところのメラノサイトより表皮細胞へのメラニン色素の伝達が、本腫瘍ではもはや行なわれない事を各種染色法を用いて立証した。

なお、腫瘍細胞巣の辺縁部から中心部に至る間に見出されるメラノサイトの変性種々相を段階的に詳細に研究し、従来見逃されて来たメラノサイトの形態学的な変化を基底細胞癌を通じて追求した。故に、臨床的にも、また、腫瘍の研究面においても貢献するところ多大なものがあり、価値あるものと考える。